
Death Eater

玲瓏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Death Eater

【Nコード】

N5434B

【作者名】

玲瓏

【あらすじ】

普通の高校に通う女子高生、奈玖弥生。ナクヤヨイ彼女は普通の【日常】に紛れ込む【非日常】に悩まされる。ある日、弥生と同じクラスに現れた転校生。転校生との出会いにより、弥生は【非日常】と対面することとなる。

第一話 【日常】（前書き）

この連載小説『Death Eater』に興味をお持ち頂きありがとうございます。この小説はジャンル【その他】に分類されておりますが、一部グロテスクな場面や、怪奇現象等が表現されます。苦手な方はご遠慮ください。また感想・アドバイス等の方もお願い致します。

第一話 【日常】

「やつばあゝい！」

遅刻だ！遅刻！！まあいつもの事だけど…てへっ♪
ってアホなことやってる場合じゃない！
ほら、美佳ちゃん呼びにきてるよお。

「ヤヨ、ヤヨ〜！」

私は急いで白と青で彩られたＴシャツに腕を通し、青に白のラインが入った清涼感たつぷりのスカートを履く。これは勿論コスプレではなく、学校の制服である。

「美佳ちゃん、あと２０分だけ待ってえ」

「アホかあ！あと３分で出ないと完全に遅刻だぞ！」

私は苦笑いでダンスから取り出した白のソックスを転びそうになりながら履いた。

「ヤアヨオ〜」

もう半分諦めてる美佳ちゃんの声がドアの外から漏れてくる。
私は胸に赤いリボンをしめ、最後に茶色がかった腰まである長い髪を櫛で数回なでた。

「きつとあたしも…」

ついに美佳ちゃんはブツブツと愚痴り始めたみたいだ。

ごめんね、美佳ちゃん♪

机の上に散らかっている教科書を適当に鞆に詰め込み、玄関で黒の革靴を履いて、勢い良く外開きのドアを開けた。

「美佳ちゃん、おつはよう♪ …… って、あれ？」

ドアを開けた場所には私と同じ制服を着て、肩口で綺麗に切りそろえられた金髪が特徴的な女の子、東西^{トウザイ} 美佳ちゃん^{ミカ}が額を抑えて座り込んでいた。

「美佳ちゃん？」

「ヤヨ…頼むからドアはゆっくり開けてくれ」

それは美佳ちゃんの涙の懇願だった。

「もう、まだ痛むよ」

美佳ちゃんが額をさすりながら私を恨めしそうな目で見ている。
今や美佳ちゃんの額は赤く腫れていた。

「ご、ごめんね。別にわざとやったわけじゃ」

私の釈明は美佳ちゃん言葉によって中断される。

「あつたりまえだよ！こんなんわざとでされたら、たまったもんじ

やないよ！…でもなあ、なんか遅刻って分かんると、急ぐ気にもなれないな」

私はほぼ毎日遅刻だから今更って感じだけど。

「美佳ちゃん、ちゃんと遅れないで学校行ってるも…」

またしても私の言葉は中断されてしまう。だけど今度は美佳ちゃんが原因ではない。

私は言葉を発していた口だけでなく、歩いていた足、まばたきしていた目、息をしていた鼻までも活動を停止していた。

私が凝視していモノ、人みたいだが、歩いている足取りには生気を感じれない。

「ヤヨ、また見えるの？」

美佳ちゃんの声に軽く頷いただけで答えた。かろうじて耳は機能していたみたいだ。

ソレは重い足取りで徐々にこちらに近づいてくる。白いYシャツに赤い水玉模様のペイント。…ううん、赤い水玉模様はYシャツだけではなく、手や顔、そしてソレの通ったアスファルトにも点々とついている。

間違いない”血”だ。

「ヤヨ！ヤヨ！！」

急に私の目の前に現れ、肩を掴んだ美佳ちゃんに驚く。そして力なく笑顔を返した。

美佳ちゃんは急に現れたのではない。私の目に映っていなかったただけ。それは学校に遅刻するほどではないが、よくあることなの

で理解するのは簡単だった。

「ヤヨ、大丈夫か？」

「うん、ありがとね。美佳ちゃん」

美佳ちゃんの声は、さっき私の目を覚まさせてくれた力強い声ではなく、心から私を心配し、そして癒してくれる優しい声だ。

美佳ちゃんは私にとって”守り神”であり、”女神”なのだ。
そんな美佳ちゃんは私は大好きだ♪

「さあ、いくら完全に遅刻とは言え、ホームルームHRが終わる前には教室につき
かなきゃ、さすがに一限目にまで遅れるのはマズいだろ」

美佳ちゃんは私の手を握って走り出した。美佳ちゃんが足早に
コを去る理由はもちろん私を気付かったことだろう。さっきの私
の満身創痍の笑顔が原因…かな。

だけど私は何も言わずに美佳ちゃんについていく。
美佳ちゃんの気付けいが嬉しかったから。

私と美佳ちゃんは頭を押さえながら自分の席に向かった。私の席
は廊下側の後ろから二番目。窓側には劣るが、なかなか良い席であ
る。私の後ろが美佳ちゃん、二人並んで席に座った。ちなみに私
と美佳ちゃんが頭を押さえてる理由は遅刻が原因で担任から拳骨ゲンコツを
貰ったからである。

「おっはよお、弥生、美佳」

綺麗な黒髪を二つのおさがが特徴的な私と美佳ちゃんの、もう一人の親友、真宮^{マミヤ} 梓ちゃん^{アスサ}がにこやかな笑顔で出迎えてくれた。すぐに分かることになると思うが、かなりの天然である。

「おはよお、梓ちゃん♪」

「アズ（梓）、おはよお」 美佳ちゃんは隣の席の梓ちゃんと話してるが、私は挨拶もそこそこに、席に座って持っていた鞆を整理する。

だって朝急いでたから何持ってきたか分かんなくって…てへっ♪

「なあなあ」

美佳ちゃんが後ろから肩を小突いてきた。

「うちのクラスにあんな男子いたっけ？」

小突いてきた本人は口を開けて教室の窓側の席を指さしている。その指先をたどると窓側最後席に見知らぬ男子がいた。

肩下まで伸びた黒髪に無字の青のYシャツを上から二つまでボタンを開け、黒のズボンを履いている。ネクタイを締め、背広を着れば完璧なスーツ姿だ。更に首からは十字架を象ったシルバーアクセサリーまでしている。

うちの制服とは似ても似つかない…。よく先生達もあれで登校認めたなあ。

「でも、何か間拔けたって言うか、呆けたって言うか、何とも言えない表情してるな」

言われてみれば、どこか力なく、焦点の合っていない目つきで黒板

の方を見ている。

「あの子、名前何て言う子なの？」

同年代の男に”子”と言うのは正しいのか分からないが、興味本意までに聞いてみる。

「確かあ…えつとお…え…え…え…え」

首を傾げて人差し指を頬に当てると言う可愛い格好をしてる。

「はあ…要するに、忘れたんだな」

梓ちゃん、さつそくの天然パワーか。

それで美佳ちゃん、何で私の手を取るの？

「アズが思い出すのを待っても無意味…直接聞きに行った方が良いな」

美佳ちゃんは転校生に向かって一直線に歩き出した。

私の手を握ったまま。

「え、ちょ…美佳ちゃん!？」

私の声は聞いていない。いや聞こえてないみたいだ。

いや、あの、手…折れるから!強く握りすぎ!

「あたしは東西 美佳、こっちのちっこいのが奈玖^{ナク} 弥生^{ヤヨイ}だ。」

美佳ちゃんは転校生の前で勝手に自己紹介をすると、次に私まで

紹介した。

ちっこいって、私150はあるもん……はい、嘘です。149しかないません。

私が150って考えた瞬間、遠くから梓ちゃんが本当に？みたいな顔するから本当のこと言っちゃった。恐るべし梓ちゃん！

転校生は話しかけられて数秒経ってから、ようやく焦点の合ってなかった目を美佳ちゃんに合わせ、そして私に向けた。

二重のぱっちりした、澄み切った黒い目。だけど、その澄み切った目の奥には……。

失礼だとは思ったが、私は美佳ちゃんの後ろに隠れてしまった。

「それで君の名前は？」

美佳ちゃんの言葉で、やっと私を見ていた目が美佳ちゃんに戻った。

「閻魔^{エンマ} 彼方^{カナタ}。よろしくね」

彼方君はそう言って爽やかに笑った。

私の後ろでは女子の黄色い歓声があがっている。

”異性”に疎い私は今更ながら彼方君が普通の人より美形であることに気付いた。

って……。美佳ちゃん！手が……。私の手が……！

「彼方……。ここにくる前はどこに住んでいたの？」

私の手の状況を知ってか知らずか、美佳ちゃんは会話を続けた。

私は彼方君が返事をする前に美佳ちゃんの肩を叩いてギブアップを告げる。

美佳ちゃんは首を傾げた後、ようやく私の手を解放してくれた。スポーツ万能の美佳ちゃんに、手を本気で握られたら折れるところか、粉々に砕けちゃうよ。

「僕は…海外に行つてたんだ。父さんの私情でね」

皆は、

「へえ、すごいねえ」

だとか、

「そうなんだあ」

とか言つてゐるが、私は彼方君が返答するまで何を考えてたのか、そして美佳ちゃんの耳が赤くなつてゐる事の方が気になつていた。

私は美佳ちゃんの後ろから見てゐるだけなので分からないが、きつと顔も真っ赤なのだろう。

照れる美佳ちゃんを可愛く思ひながらも、私は私の”守り神”であり、”女神”である美佳ちゃんをそうさせてゐる彼方君に少し嫉妬してゐた。

「彼方、まだこの学校のこと、全然わかんないだろ？あだし達が昼休みに案内してやるよ」

え？今、私達つて言つた？

「な、ヤヨ？」

振り返つた美佳ちゃんの顔はやっぱり赤かつた。

「う、うん」

そう答えるしかなかった。

正直、私は彼方君が苦手だ。いや、正確には彼の目が…。

「ありがとう。助かるよ」

ここで一限目の始まりを告げるチャイムが鳴ったので、私達は自分の席に戻った。

「美佳、頑張ってたね♪」

梓ちゃんが悪戯っぽく美佳ちゃんに囁いた。

「な…何のことだよ」

その言葉に私と梓ちゃんは目を合わせて笑った。

普段は男勝りな美佳ちゃんの”乙女”の部分を見た気がした。

第二話 【デスゲーム】

退屈な授業も、チャイムの合図でようやく四限目が終わり、待ちに待った昼休みが訪れた。

いや、待ちに待っていたのは私ではないけれど…。

「美佳、随分急いでお弁当を食べるのね」

そう、待ちに待っていたのは美佳ちゃんだ。

「い、いつもこれくらいだろ」

私と梓ちゃんは、今日何度目か分からないが、目を合わせて笑った。

「あたしの事は良いから、あんた達も早く食べるよ。彼方待たせちゃうかもしれないだろ」

「僕ならいくら待っても構わないよ」

突然後ろから声をかけられ、私はスプーンを取り落としてしまう。

「か、彼方急に声かけるなよ」

美佳ちゃんは”急に”声をかけられて驚いている。みたいな演技をしているが、間違いなく”彼方君から声をかけられた”からだろうなあ。

なんて思いながらも机の下に落ちたスプーンを拾おうと手を伸ば

す。届かない…。仕方なく頭を机の下に入れる。

「あ、気にしないで。僕屋上で暇つぶしてるからさ」

私がスプーンを拾おうと格闘しているうちに、また背後で女子が歓声をあげる。きつと彼方君が笑顔を振りまいたのだろう。

それから彼方君が遠ざかる気配がした。

「あ!」

隣で美佳ちゃんが大きな声をあげたのは、私がちょうど落としたスプーンに手が届いたときだった。

「大変だ。大変だぞ!」

美佳ちゃんは何を思い出したかは知らないが、大きな声を出しながら人の背中を強く叩くのはやめてほしい。

さらに背中を叩かれ続けられたので、とっさに頭を上げてしまい、後頭部を机にぶつけてしまった。

「っ!痛ったあゝい」

「そんなことよりさ、彼方がヤバいって」

涙目の私に”そんなこと”って、美佳ちゃんそりやないよあゝ。

横から梓ちゃんが来て頭を撫でてくれた。

それをよそに美佳ちゃんは喋り続ける。

「彼方つてば屋上って言ったよね。今屋上に行ったら…」

あ…。

確かに私も後頭部を痛がってる場合じゃないかも。

「そうね、”デスゲーム”やってる時間だわ」

私の頭を撫でていた梓の手も止まっていた。

「彼方が強制参加させられちまう前に止めないと！」

「美佳ちゃん、ちょっと待って！」

美佳ちゃんは食べかけのお弁当もそのままに屋上目指して走っていった。

手にはフォークを持って…。

いざという時、きっと凶器になるのだろう。

「弥生、私達も行くわよ」

梓ちゃん、いつの間にお弁当なおしたの？
ってまあ良いや！

私も急いで教室を出ると階段を一段飛ばしで登った。

「彼方！」

上の方から美佳ちゃんの叫び声が聞こえてくる。

どうやら彼方君は”デスゲーム”に強制参加されてしまったみたいだ。

”デスゲーム”とは、この稲穂高校の不良が集い、そこら辺の生徒を拉致し、1：1で喧嘩させ、自分達はその勝者を賭けると言う

何とも危険なゲームだ。更に怖いのはその後、敗者には罰ゲームがある。それは…。

「弥生、やっぱり閻魔君が！」

私より少し前を走っていた梓ちゃんが息を切らしながら振り返っていた。

私も梓ちゃんと同じ段まで駆け上る。

そこで見たものは最悪の光景だった。

彼方君と美佳ちゃんが不良のグループで作られた円の中央で向き合っている。

しまった…。

彼方君を心配して屋上に来た美佳が、彼方君の対戦相手になってしまったのだ。

「梓ちゃん、どうしよう」

私は頭がパニックになってしまい、どう対処すればいいのかわからない。

何とかして助けなきゃ…。

でないと、美佳ちゃんか彼方君、どちらかが罰ゲーム…集団リンチされてしまう。

「ルールは、これで分かっただろ？負けたら、ここにいる全員と戦うことになるからな」

不良グループのリーダーらしき人物が二人の中央で大声で言う。

それと共に不良達も笑う。

…何が楽しくて笑ったのか分からない。

「それじゃあ、スタート」

不良のリーダーが叫び、不良達がそれをはやし立てる。
ヤバイ、始まっちゃった！

「すみません、ギブアップです」

…え？

騒いでいた不良達も一気に静まる。

「ダメですか？僕ギブアップを…」

「ちよつと彼方！」

「てめえ、なめてんのか？それとも、よっぱどのドMなのか？」

静まっていた不良から嘲笑が聞こえる。

「そうですね、彼女を叩いたりする程、ドSではありませんよ」

彼方君の返答にまた不良グループは静まり返った。

不良のリーダーも彼方を振り返って言葉を失くす。

彼方君の理解不能な言動に怒りが込み上げてきているようだ。

「女、運が良かったな…。お前は不戦勝だ。帰れ」

不良リーダーが低くドスの効いた声で唸った。

周りの不良が後ろから美佳ちゃんを掴み、こちらに投げた。

「美佳ちゃん！」

「美佳！」

危つく階段から転げ落ちそうになるところを、私と梓ちゃんを支えた。

「さて、お前は敗者だ。早速罰ゲームを始めようか」

不良全員が指を鳴らし、不気味な笑みを作っている。

「つと言いたいが、特別ルールだ」

不良達はまた静まる。

忙しいものである。不良も大変だ。

「ここまで清々しいバカ初めてだからな…。俺が相手してやる」

「飛山さんが？」

「マジかよ」

不良達の間には動揺が走った。

「拒否権はねえが、安心しろ。今すぐじゃねえ。今夜0時、ここに来い。武器、凶器は何でもあり。今じゃ生温くなっちまった”デスゲーム”。今夜は真の”デスゲーム”の復活祭だな」

飛山と呼ばれた人は楽しそうに言うが、不良グループ達の動揺は尋常じゃない。

「分かっていると思うが、逃げたらてめえは病院行きだ。」 霊安室
「だがな」

飛山はニヤつきながら私達の横を通って去っていった。
それに続いて不良達も続々と出ていく。

次々と進む話には何がどうなったのかも分からず立ち尽くして
いた。

「彼方！」

美佳ちゃんが思い出したように彼方君に近づいた。

「彼方ごめん！あたしのせいでこんな事になって…」

美佳ちゃんの目には、うつすらと涙が浮かんている。
だが彼方君はそれに対して笑顔で答えた。

「大丈夫だよ。それより真の”デスゲーム”って？」

確かに私も気になっていた。不良達の動揺も激しかったし…。
美佳ちゃんが少し俯いて答える。

「私も詳しくは知らないが、元々”デスゲーム”ってのは、今のこ
んな喧嘩じゃなくて列記とした儀式だったらいいんだ。儀式は二
人の人物が互いに刀で斬り合い、どちらかが戦闘不能になるまで続
いたらしい…」

戦闘不能ってゲームじゃあるまいし…。

「ただ…」

梓ちゃんが急に低いトーンで喋り出す。

「“デスゲーム”は正式には“死合い”と呼ばれていた。その“死合い”、江戸時代で取りやめられた。と、されている。だけど闇では祟りや呪い、神の怒りを恐れた民が密かに続けているとされてる。いえ、続けられてるの、今も…」

梓ちゃんは、いつもの天然キャラでは有り得ないくらいに淡々と話し続ける。

少しだけ恐怖を感じる。美佳ちゃんも顔を青くして梓ちゃんの話聞いてる。

彼方君だけは、何にも変わらない表情で梓ちゃんを見ている。

「儀式の終わりはどちらかが“死ぬ”事、と昔はされていたが、実際に大事なのは“死ぬ”事ではない。二人で斬り合う理由。それは…」

第三話 【推測】

梓ちゃんは淡々と話し続ける。

「儀式の終わりはどちらかが”死ぬ”事、と昔はされていたが、実際に大事なのは”死ぬ”事ではない。二人で斬り合う理由。それは…」

「 ”血”」

今まで黙って聞いていた彼方君が一言そう言った。
それに梓ちゃんは頷き、そして急に倒れた。

「梓ちゃん!？」

「アズ!」

私と美佳ちゃんは急いで梓ちゃんに近寄り、声をかけながら体を軽く揺する。

だが反応がない。

「大丈夫だよ。少し眠ってるだけだ」

彼方君は梓ちゃんに無造作に近づくと、軽々と抱き上げた。
この細身の体のどこにそんな力があるのだろう。

「保健室に運ぶから案内してくれるかな」

あまりに彼方君が普通に話すので、私も美佳ちゃんも、普通に頷いてしまった。

「先生、梓ちゃんって…」

「ああ、爆睡としか言いようがないな。寝息たててるし」

保健の先生の言葉を聞いて、ひとまず私は安心した。

「あんたら、五限目はサボるのか？」

保健の先生の厳しいメスが入り、私と美佳ちゃんは、気まずそうに目を合わせた。

「はい、もちろんです」

えっ！？

彼方君、それって勿論なの！？

「そうか、当然だな」

先生良いの！？

と、言うわけで、私と美佳ちゃんと彼方君は、五限目を梓ちゃんの寝ている隣で”サボる”事になった。

「それじゃ、私は用事あるから、留守番よろしくな」

先生はさっさと保健室を出ていってしまった。

先生、急病人が来たらどうするんですか…。

「彼方、夜の”デスゲーム”は来ない方が良く。間違いなく、あんな病院送りにされるよ」

美佳ちゃんは突如話を切り出した。

私も空いてるベッドに腰かけ、話をする体勢に入る。

ちなみに美佳ちゃんの見解には私も賛成だ。

「大丈夫だよ、それに行かないと、もっと大変な事になりそうだし」

壁に体を任せていた美佳ちゃんが彼方君に近づく。

「彼方、飛山はやばいんだ。あいつは過去に人を刺してる…。あんなだっぺどうなるか…」

「そうだよ、明日の昼休みに屋上に行って、もう一度、”普通”の”デスゲーム”をやれば…」

私の言葉に彼方君は首を横に振る。

「明日の昼に行っても、飛山って人は真の”デスゲーム”って言うのと、変わらない事をすると思うよ」

やはり彼方君は変わらず笑顔を見せている。

「僕は少し調べないと行けないことが出来た。僕の事は心配いらな

いから、その子のこと、お願いね」

颯爽さっそうと保健室を出て行こうとする彼方君の袖を美佳ちゃんが掴む。

「っ待てよ！お前、下手したら殺されんだぞ」

その言葉にも、彼方君は微笑みながら保健室を出て行ってしまった。

「美佳ちゃん…」

「ヤヨ…。あたし、どうすれば良いんだろ」

辛い顔を見せる美佳ちゃん。

「そつだ、先生達に言って止めてもらえば」

「ダメだ。先生達は不良にビビって相手にもしてくれやしない」

何か方法は無いか…。

私は頭をフル回転させる。

「警察は？深夜に喧嘩してるって言えば」

「……………」

なぜか私の言葉に何も反応しない美佳ちゃん。数分、保健室で聞こえる音は梓ちゃんの寝息だけだった。

「なあ、ヤヨ。何で誰も警察に通報しないんだろ…」

確かに…。

私達は所詮他人事、なんて思っていたからだが、今まで”デスゲーム”で犠牲になった人の人数から考えれば、誰か一人は警察に通報しそうなものである。

「通報出来ない理由があるってことかな…？」

私が行き着いた答えはそれだった。

「もしくは…」

美佳ちゃんは別な答えに行き着いたようだ。
口を重々しく動かしている。

「通報はしてる…のかも」

私には美佳ちゃんの言いたい事が分からなかった。

「美佳ちゃん、それってどういうこと？」

美佳ちゃんは椅子に座って自分の手を見つめている。

「警察が見て見ぬフリをしているとしたら？」

私は凍り付く。いや、私の周りの空気すら凍り付いた。

「もしも、あたしの想像が当たってたとしたら…」

もしも、美佳ちゃんの想像が当たってるとしたら…。

「この町は狂ってる」

私と美佳ちゃんの声が重なった。

「どこにでもある、”ただ”のイジメかと思ってた。私達も同罪なんだよね…」

私の口から漏れる真実。口から出すことで、私の脳は今起きている物事をリアルに理解した。

私の頬には涙が伝う。

「彼方…一体どうすれば…」

美佳ちゃんは頭を抱え込んだ。
スヤスヤと眠る梓ちゃんの寝顔を見ながら、私も俯いてしまった。

「弥生、弥生」

……ん。

「弥生、起きてえ」

私の体を揺るのは…

「梓ちゃん？」

「弥生、私いつの間に保健室きたの？」

「どうやら私は知らないうちに寝てしまったみたいだ。」「梓ちゃん、体、もう何ともない?」

「うん、何でもここに寝てたのかを聞きたいくらいだし…」

梓ちゃんは倒れる前とは違って、いつもと変わらない雰囲気だ。

「今日の深夜に”デスゲーム”するって言って、不良の人達が出ていつて…それから…あれ?」

梓ちゃんは彼方君の名前を忘れた時のように、頭を傾げて頼に人差し指を当てた。

「どうやら自分で言った事も忘れているみたいだ。」

「あれれ? 美佳と閻魔君は?」

「そうだ、彼方君は元々出て行っていたが、美佳ちゃんの姿が見えない。」

「美佳ちゃん、どこ行っちゃったんだろう…」

「弥生、取りあえず教室に戻ってみよう。もう帰りのHRも終わってる時間だわ」

「本当だ…」

もう6時になっている…。私は何時間も眠っていたようだ。

教室に戻っても、そこには誰も居なかった。

静寂…不気味すぎる。私と梓ちゃんは帰る用意を整えると、すぐに教室をでた。

お互いに何も言葉は交わさなかったが、おそらく感じている事は同じだったのだろう。

「美佳ちゃんも彼方君も学校に居なかったね」

「美佳の携帯に連絡しても反応ないしね」

私と梓ちゃんは家までの帰り道をノロノロと歩いていた。

美佳ちゃん、どこ行っちゃったんだろう…。

「それじゃあ、私はこっちだから…」

梓ちゃんは沈んだ声で言った。

「うん、梓ちゃん、また明日ね」

「うん、また明日」

どこか私も声が沈んでいる事に気付いた。

……。

やっぱり気になる。

明日になって、また朝遅刻して学校に行けば、美佳ちゃんも梓ちゃんも、そして彼方君も普通に学校にいる。

その期待も多少はあったが、深夜の学校で何か起こる気がしてならなかった。

「僕のことは心配いらないから」

彼方君のその言葉と、美佳ちゃんの思いつめて俯いた顔…。

私は意を決して学校へ戻った。

時間は23時30分。約束の時間まで、後30分。

時間に近付いて、不良達が集まるかと思ったが、依然として校舎内も屋上も静かだった。

私はゆっくり階段を上り、屋上に続くドアをゆっくり開ける。

7月だと言うのに、冷たい風が私の肌を突き刺していく。

屋上は闇に包まれているものの、見える範囲には誰一人として動いている生物はいなかった。

「あんたは…」

突然背後から声をかけられて私は飛び上がる。

「俺だよ」

屋上の給水等のでっぺんから人が降りてきた。

「…彼方君？」

「ああ、だが何でここにきた。心配はいらないと言っただろう」

…何かキャラ違くない？

「ご、ごめん。でも…美佳ちゃんが居なくって…もしかしたら、ここに来るんじゃないかなって思ってた…」

彼方君は顎に手を当てて何かを考え始めた。

「彼方君？」

名前を呼ぶと彼方君は視線を地面のアスファルトから私の目に移した。

忘れていた…。

やっぱりこの目は苦手だ。

「よお、女の応援つきで来たのか？」

屋上唯一のドアが開かれ、そこから飛山が現れる。

「こいつは関係ない。あんたの相手は俺だろう？」

彼方君は飛山を挑発するように前に出ていく。

「お前、昼間とキャラ違くない？」

私は奇しくも、飛山と同じ事を考えていたらしい。

「そんなことはどうでもいい。あんたに聞きたい事がある」

彼方君は目つきも鋭くなっている。

「聞きたい事ねえ…俺と”デスゲーム”をした後、お前が聞ける状態なら答えてやらないことはないぜ」

飛山の両手には人差し指と中指と薬指の間にナイフが一本ずつ、計四本のナイフが握られていた。

これは本当に彼方君が殺されてしまう。

私はそう思い一歩前に出たが、彼方君が私の前に手を出して首を振る。

「彼方君……」

「大丈夫って言ってるだろう」

彼方君は笑顔だった。

ただ、昼間見せた爽やかな笑顔ではない、片方の口角を持ち上げた邪悪な笑顔だ。

「行くぞ」

飛山がナイフを煌めかせて彼方君に突進し、右手に持っているナイフを突き出した。

彼方君は、それを右足を半歩引いて体を軽く捻ってナイフをかわす。

飛山は更に裏拳のように右手を振るう。ただし、当たれば裏拳の痛みではなく、ナイフが突き刺さる灼熱感が襲うだろう。

だが彼方君は軽く身を引いただけで避ける。

その後も飛山がナイフを振るい、彼方君がそれをかわす。それが何度も繰り返された。

そのうち、飛山が動きを止めて腕を組んで話し出した。

「お前、なぜ反撃しない。お前の腕なら、俺はすでに倒れているはずだ」

飛山も彼方君も、あれだけ動いて、まったく汗をかいていない。どんな体力しているんだろう。

「あんたが倒れたら聞きたい事も聞けなくなる」

彼方君が無表情のまま言うと、飛山は声を出して笑い始めた。
……壊れた？

「アハハハ！」

いや、参った！この勝負は、お前の勝ちだ。何でも聞け」

私にはよく分からないが、彼方君が勝ちらしい……。
まあ怪我なくて良かったよ……。

”勝ち”と聞いても彼方君は無表情のまま質問を開始した。

「まず……」

いや、開始しようとした。

「「「！？」」「」」

急に校舎が揺れ、屋上のドアが開いた。

第四話 【非日常】（前書き）

今回は少し短いです。

第四話 【非日常】

「キャ!？」

私はあまりの揺れに立っていれなくなる。

「なんだこりゃ!」

飛山もバランスを崩してナイフを落とした。

「二人とも、じっとしている」

唯一、彼方君だけは何事もないように仁王立ちし、そして屋上のドアを見つめている。

この大きな地震にも動じず、命の危険にも動じない。
彼は何者なんだろうか…。

「女、男」

彼方君が私達に話しかける。

って、もう少し良い呼び方ないの…。

「明、俺は飛山^{ヒヤマ} 明^{アカラ}だ」

飛山にですら、その呼び方に反感を覚えたらしく、自分の名を名乗った。

「私は、やよ」

「明、女、これから地獄を見ると思っとけ」

無視ですね…。

「お前、それはどういう意味だ？」

飛山改め、明君が彼方君を指差した。

「彼方。閻魔 彼方だ。
地獄の意味は…」

すぐ分かる…とでも言いたかったのだろうか。

……。

「来たぞ…。明、女、絶対にそこから動くなよ」

彼方君は未だ目を細めて屋上のドアを見つめている。いや…今はもうドアから出てきた”人”を見つめていた。

「誰だ？」

明君がドスを聞かせた声で問う。

「明、見えるのか？」

彼方君が不思議な事を言ったのは分かる。

だけど、私の脳は理解出来ていない。

私の脳は…いや、私の体、私のすべてが目の前に現れた”モノ”
でいっぱいだった。

”ソレ”はゆっくり近づいてきて、月の明かりで姿が目映る。

「おい、マジかよ……」

明君の呟きと、そして”ソレ”の動く音が辺りを支配する。

ヒタヒタ…ヒタヒタ…

あいつだ…。

朝も目の前に出てきた、血まみれの男。

そいつは口に水を含んだようにガラガラと喋った。

「ギ…ギシキハ…チュ…チュウダンヲ…ユ…ユルサレナイ」

聞いているだけで不愉快な声…そして私達に恐怖を与える声。

「儀式…”死合い”の事か？」

気のせいだろうか、さすがの明君の声も震えて聞こえた。

「無駄だよ、明。奴らには聞こえてないよ」

”奴ら”？

彼方君は…。

何か知っている…？

”男”は足を引きずるように、ゆっくりと近付いてくる。

「奴らは伝えるだけ、聞く耳を持たないのさ」

更に彼方君は目を瞑ってブツブツと何かを呟き始めた。

そしてついに明君は”男”のスピードと同じスピードで後ずさり
を始める。

「おい、彼方。聞こえてないのは分かった。で、どうすればいい！
？」

明君と私が横に並んだ。

「おい、彼方！！」

明君は私の前に手を出して強制的に自分と同じように下がるよう
にした。

一応守ってくれてるのだろうか。

「ギ…ギシキハ…………ユ…ユルサレナイ」

「お前に許してもらうつもりはねえよ」

閃光…。

そして鮮紅。

私の前を”黒”が駆け抜け、”紅”が宙を舞った。

「女、明。地獄が始まるぞ」

”男”は倒れ、その背後から彼方君が現れる。

「…………血…………いや……………」

私は突然目の前の”人”から”血”が吹き出し、”人”が倒れた事で頭がパニックになった。

「人が…そんな…」

彼方君が私に近づく。

いや、彼は”人”殺した。

「女、落ち着け。さっきのは…」

「いや、お願い…近付かないで…」

彼方君の血に染まった手から必死に逃げた。

「オンナ！オレノイウコトヲ」

ダメだ…。

何を言ってるかも理解できない…。

気分が悪い…。

私は膝から崩れ落ち、嘔吐して意識を失った。

私の目の前に何かが立っている。

人なのか、そもそも生物なのかも分からない。

姿はボヤけてて、目を細めても、その正体は分からなかった。だけど、こう言ってるのは分かる。

「”血”の呪いは”血”で解かれ、”骨”の呪いは”骨”で解かれる。 ”一族”の呪いは…」

そこで”ソイツ”の言葉は途切れた。
私は意味も分からないのに、言葉の続きが気になってたまらなかつた。

「…じゃあ…だっというのか!？」

私の耳にはまた別な人物の声が入ってきた。

「明、静かにしろ。」奴ら”に気付かれちまう」

これは…そうだ。

明君と彼方君の声だ。

私は痛む頭を押さえながら体を起こす。暗すぎてよく見えないが…保健室？私はいつの間にか保健室のベッドで寝ていたようだ。

「女、起きたか」

彼方君が私起きたことに気付き隣に座ると、目を合わせ、手を取った。

って、えっ!？

「ちょっと彼方君!？」

「大声を出すな。」奴ら”に気付かれる」

”奴ら”…？

そうだ!!

明君と彼方君が”死合い”を始めて、彼方君が明君に何かを聞こうとした。

その時、大きな地震が起こって、屋上のドアが開いて、そしたら…。

「おい、女!女!」

気付くと彼方君が私の肩を揺すっていた。

「…あ。私…」

「良いか、よく聞けよ」

放心状態の私に彼方君は諭すように喋る。

「俺たちは今、学校に閉じ込められてる。”奴ら”のせいだな」

彼方君は私の目を見つめて、そして深く目を閉じ、ゆっくり開けた。

「お前等は必ず守ってやる」

彼方君の目は”金色”に輝いていて、

「Death Eater」デスイーターの名において

手には大きな十字架を持っていた。

第五話 【奴ら】

彼方君は私達を守ると言い、すぐさま保健室から出ていった。

…守るんじゃない？

「心配するな。彼方は…えっと…あゝ」

「弥生…です」

そう言えば、結局私は名乗れなかったままだった。

「ああ、それじゃあ、弥生の姉ちゃんだな。彼方は図書室に行っただけだ。隣の隣。安心しろ」

弥生の姉ちゃんって…。

まあそれは良い。

「待って、一から説明して欲しいの。あいつらは何者で、何が狙いで、私達に何をさせたいのか。そして…彼方君は…何を知ってるの？」

私は聞きたい事を矢継ぎ早に明君に質問をぶつけた。

自分の息が苦しくなっているのも忘れて…。

「弥生の姉ちゃん、焦るのは解るが、俺にも全部は分からねえ。分かっているのは」

明君は椅子に座り、自分のこめかみを右手で揉みながら語り始めた。

「これから話すのは、全て彼方から聞いたことだ。俺に質問されても分からないからな」

私は頷いた。

「まず、奴らの正体だが…あれは”霊”だ」

…何？

「霊？それって…幽霊？」

明君が無言で頷く。

「でも霊って」

今度は無言で手を前に出した。

「彼方から聞いたことだ。俺には分からねえよ」

「……ごめんなさい」

もう一度、手を前に出して構わないと言った。

「ああ。彼方の話じゃ、いや、全部彼方の話だが…俺とヤヨ姉が見た霊は

”伝言者”

って奴らしい」

「伝言者…？」

明君はまた無言で頷いた。

…話は気になるけど、今度は”ヤヨ姉”って…。

「名前の通り、伝える為だけに出てくる霊で、伝わらなかったり、相手が自分の思うように動かなかったりすると…」

そこで明君の言葉が詰まる。だけど私には言いたい事は分かった。気になる事は多い。

「明君、あなたの言い方では…」

「その通りだ…。どうやら”伝言者”ってのだけじゃないらしい。俺が他に聞いたのは

”永恨者”

この世の全てを恨む者…

そして、

”断罪人”

現在確認できてる霊の中で最強の霊…らしい」

何だか…。

頭が痛む…。

気を失ってたせいかなあ…。

「今の状況は、ヤヨ姉が気を失ってから、伝言者が何匹も現れてな、取りあえず保健室までヤヨ姉を運んだんだが…」

明君は今度は目頭を押さえている。

「奴ら、学校の至る所に居てな…何とかここに逃げ込んだんだが、ドアが奴らの圧力で押し破られそうになった。だがそこで彼方が部屋の四方に自分の血で何か書いたんだ。すると奴らの気配はしなくなった。彼方が保健室に結界を張ったらしい…。とんでもねえ話だろ…」

たしかにとんでもない話だ…。
だけど…。

話を聞いてると妙に納得できた。

「奴らの目的は？」

「伝言者が言った通り、儀式を続けさせる気らしい…」

…奴らはなぜ儀式を続けさせるのだろう…。

奴らが儀式をさせてメリットがあると思えない。

私はなぜか…異常に冷静になって考えていた。普段から見てたから…？

いや、私は……………。

「彼方は…。何かこの土地の過去とか、町の風習を調べないといけない…。」

まただ…。

私にも意味はさっぱり分らないのに、なぜか心の奥で納得してしまう。

まるで自分の心が自分の物じゃないみたいだ…。

「彼方君は…一体何を知ってて、何をしたいんだろう…」

その質問に明君も頭を書く。

「正直分かんねえ…。だが、彼方は強い、そしてデスイーターだと…あいつは自分でそう言った」

確かに彼方君は自分でデスイーターだと…。

「そう、俺はデスイーター。他の詳しい事は、”ここ”を出れたら教えてやる。行くぞ」

彼方君はドアの前に立っていてそう言った。

「彼方君、”ここ”って学校を抜ければ大丈夫なの？」

「正確には、”異世界”だが…。ま、今はどっちでも良い。とにかくここを抜けるのが先決だな」

よく見れば彼方君の持っている大きな十字架の先端からは血が滴り落ちている。

それを見た明君が苦悶の表情を見せた。

「やつぱり…いるのか？伝言者…」

彼方君は頷いて十字架を自分の目の前まで持ち上げ、十字架の長い部分に手を添えると、ルビーが光り、黒の十字架の剣になった。

「それ…何？」

私は目の前で起こった【非日常】に絶句する。

「出たら説明する。今は武器と見てくれれば、それで良い」

私は返答に満足できなかったが、取りあえず頷いた。
確かに急いだ方が良さそうだ…。

保健室の外から複数の嫌な音が聞こえる。

ヒタヒタ…ヒタヒタ…。

奴らが歩く音だ！

「さあ、時間だ。結界の効果が切れるぞ」

…えっ…。

彼方君…？

それって…。

けたたましい音を立ててドアが叩かれる

「明、分かっていると思うが」

「ああ、大丈夫だ。彼方から貰ったナイフ二本。これじゃなきゃ、
奴らは倒すどころか、触れることも出来ない…。だろ？」

保健室のドアは軋み、悲鳴声を上げている。今にもドアは碎け散
り、奴らが入って来そうだ。

「明、大切な事が二つ抜けてる。一つは、ナイフは護身用だ。自ら
前に出て戦うにはリーチが短すぎる。もう一つは…女を守ることを
第一としろ」

彼方君が喋り終わると同時に、ついに保健室のドアが破壊された。

ヒタヒタヒタヒタ…。

数匹の伝言者が入ってくる。

「ギ…ギシキヲハジメロ」

「ギシキヲ…ギシキヲヤメルコトハ…デキナイ」

伝言者は次々と伝えるべき事を口にし、近づいてくる。

「儀式、儀式、儀式、儀式…そんなに”血”が必要なら…自分達の血を使ってくれや」

彼方君は口角を吊り上げ、十字架の剣を引きずりながら走り出した。

おもむろに伝言者を弾き飛ばしながらも、奴らの中央で止まる。

「祭りの始まりだな。”血祭り”だが」

彼方君は自分の体を軸にしながら十字架の剣を振り回し始めた。

剣は伝言者の足を、胴を、頭を輪切りにしていく。
斬られた伝言者の血や肉片が辺りに降る。

「キャ…イヤァ！」

私の靴に肉片が付着し、青と白で彩られた爽やかなはずの制服もどす黒く染まり、気持ち悪い生暖かさが服を通して感じられた。思わず尻餅をついてしまう。

「ヤヨ姉、慣れる…とは言わないが、奴らは学校中にいる。一々ビビってたら、身が持たねえぜ」

明君自身も顔を青くしながら私の手を持って体を起こさせた。彼の手にも、私の手にも血が付着している。

「さあ、第一陣は撃破したぜ。第二陣が来ないうちに行こう」

彼方君は十字架を振り、付着していた血肉を振り払った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5434b/>

Death Eater

2011年1月4日03時27分発行